

「見渡せば花も紅葉も」（新古今秋上・定家）の歌 をめぐって

瀬古， 確

<https://doi.org/10.15017/12274>

出版情報：語文研究. 18, pp.48-55, 1964-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「見渡せば花も紅葉も」(新古今秋上、定家)の歌をめぐって

瀬 古 確

屋の秋の夕景には花も紅葉もいらすと云々。然れども始めの説感深しと師説なり。」

本居宣長は美濃の家づとに於いて

二三の句明石ノ巻の詞によられたるなるべけれど、けりといへる事いかゞ。其故は、けりといひては、上句さぞ花もみぢなど有ておもしろかるべき所と思ひたるに、来て見れば、花紅葉もなく、何の見るべき物もなき所にて有けるよといふ意になればなり。そも、浦の苫屋の秋の夕へは花も紅葉もなかるべきは、もとよりの事なれば、今さらなかりけりと、歎ずべきにあらざるをや。我ならば「見わたせば花ももみぢもなにはがたあしのまろやの秋の夕暮」などぞよまゝしとぞある人はいへる。

の如く言つてはこの歌の改作さへも示してゐるのであるが、「花も紅葉も」を実景と見てゐることは確かである。

之に対して石川正明は尾張の家づとに於いて

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

なる歌は古来三夕の歌として有名であるが、その解釈については必ずしも未だ一定してゐないのである。即ち昭和の初年にあつて斎藤茂吉氏と谷淵氏との間に論戦の行はれた如く二説があつて相譲らないのである。兩氏の論争の中心は第二、三句の「花も紅葉もなかりけり」にあるのであつて、斎藤茂吉氏は「見渡せばもう花も紅葉もない淋しい浦の苫屋の秋の夕暮である」と実景として之を解せられるのに対して、谷氏は「浦のとまやの秋の夕ぐれば見渡せばあの美の代表の如く言はれる春の花秋の紅葉も問題にならぬほどの絶景である」と之を観念的に取扱ひ、比較の標準として花や紅葉を用ゐてゐるものと見るのである。

既に早く北村季吟の「八代集抄」にあつても

是につき両義あり、此の浦の苫屋の秋夕を、見渡せば花も紅葉もなきに、いふよしなき景気ありといふ説あり。又此の浦の苫

浦の苜屋に花もみちのなき物とはいかで定めらるるならん、磯山浦はの桜楓はめいほくを失ひたりと愁申すべし。されど此の歌はふみ月葉月の夕ぐれにて花のなきは勿論の事もみちもいまだぞめあへぬ程の時也。一首の意は浦の苜屋の秋の夕ぐれをみ渡せば花もみちの事も忘れてあはれにをかしきぞと也。俗にいほぐ花もいらぬが、紅葉もいらぬといふほどの事也。しか心うつす趣は詞のうへにはなけれど浦の苜屋の秋の夕ぐれといへるあはれなるさま言外にうかびてみゆるなり。

と言つては「花も紅葉も」をたゞ観念的に眺めようとしてゐるのである。

かくて宜長の如く花も紅葉も存在しないと見るものには鴻巣盛広・山崎敏夫・石田吉貞・斎藤茂吉・窪田空穂等の諸氏があり、正明の如く花もみちも問題でないとするものには塩井雨江・佐々木信綱・尾上柴舟・谷鼎・川田順等の諸氏がある。猶恩師小島吉雄博士の如く

「浦の苜屋の秋の夕ぐれは一物のさへぎるものもなく、花や紅葉の美しさもないが、花や紅葉の風情にもまして哀れ深い情趣を蔵してゐる風景である。」

と言はれては、斎藤氏や谷氏の立場とは違つて之等を包容するやうな説も現はれてゐるのである。

以下少しくこの歌について私の考を述べてみたい。

二

先づこの歌の「見渡せば」と言ふ言ひ方は新古今集の中にも五例

ほど之を見出だす事が出来るのであつて、当時としては好んで用ゐられたものと思はれるけれども、この歌の解釈にさして影響する所は少いやうである。たゞ

見渡せば霞のうちもかすみけり烟たなびくしほがまの浦

(雑歌中、家隆)

なる一首は春のしほがまの風景を写したものととして多少この理解に役立つのではないかと思はれる。

「花も紅葉も」は斎藤、谷西氏の論争の中心となつたのによつても、花や紅葉がどのやうに眺められてゐるかを考察してみなければならぬであらう。

既にこの句は源氏物語の明石の巻に

はるばると物のとゞこほりなき海づらなるに、中々春秋の花もみちのさかりなるよりはたゞそこはかとなうしげれるかげどもなまめかしきに

とあるのに據つたものだと言はれてゐる。抑も「花も紅葉も」といふ言葉は源氏物語にあつては、「花鳥」と共に風物の代表として屢々用ゐられてゐるのを注意すべきである。即ち

時々の花紅葉空の気色につけても心の行く事も侍りにしかな

(薄雲)

をりふしの花紅葉につけて、哀をも情をも通はずにくからず物し給ふあたりなれば(稚本)

などの如き用例があつて春秋のものの代表として花と紅葉とを挙げてるのであり、明石の巻の如き春秋の花や紅葉の美しさにも増して夏海辺の緑蔭の美しさに心を引かれたものと思はれるのであ

る。源氏の作者が春や秋の風物ばかりでなく夏や冬のものにも強い関心を抱いてゐた事は、夏の薔薇のしめやかな趣を描いて

階のもとを薔薇気色ばかり咲きて春秋の花盛よりもしめやかに
をかしき程なるにうち解け遊び給ふ（賢木）

と言つてゐる所や、冬の月の雪に映えた美しさを賞美して

時々につけても人の心をうつすめる花紅葉の盛よりも冬の夜の
すめる月に雪の光りあひたる空こそ怪しう色なきものの身にし
みて此の世の外の事まで思ひ出され面白さも衰さも残りぬをり
なれ。すさまじき例に言ひ置きけむ人の心浅さよ（權）

と言つてゐる所にも之を窺ふ事が出来るとであらう。しかもこれらの例にあつても春秋の花紅葉は夏の緑蔭とか冬の月の雪に映えた美しさとの比較上引合に出されてゐるのである。

かくの如く夏や冬の風物の美しさを敍べるのにあつて、春秋の風物の代表として、花紅葉を比較の標準にする事は、如何にも尤と思はれるのであるが、秋の夕暮の浦の苦屋の風景を敍するにあつて、春と秋とのものを引合に出すのは如何なものであらうか。もとより緬念的に美の代表として出すには差つかへもないであらうけれども、同じ秋のものと比較するのにはいさゝか落附かない感じがする。即ち春秋の美の代表としての花紅葉を比較の標準とするのは他の季節夏や冬には相應しいけれども、この場合には似合はないやうに考へられるのである。私は寧ろこの「花も紅葉も」共に秋のものとして秋の野を飾る千草の花も木々の美しい紅葉も見受けられないと考へたいのである。源氏物語にも少女の巻に九月のころ中宮より紫の上への贈物を写して

風うち咲きたる夕暮に御箱の蓋にいろいろの花紅葉をこきませ
て此方に奉らせ給へり。

と記されてゐるのは、花も紅葉も共に秋のものとして挙げられてゐるのである。花をも紅葉をも共に秋のものとする事によつて、この歌の上句と下句との關係は一層滑かになるのではなからうか。即ち速い春のものと秋のものによつて秋のものに比較するといふのでなく、同じ秋の風景の中から前音を選ぶか後者を選ぶかの問題となつて、上と下との關係が一入自然になるのではないかと思ふのである。しかも世の常の花や紅葉を取上げる事なく、浦の苦屋の秋の夕暮といふ特殊なものを選んでゐる所に、この作の特異性があるのである。その上次の「なかりけり」が既に恩師小島博士によつて指摘せられた如く、「問題ではない」と言ふ意味ではなく、「存在しない」と言ふ意味の用例しかないのにも見ても、目の前に秋のものとしての花も紅葉も眺められないと言つた淋しい風景を描いてゐるのではないかと思ふのである。

新古今集にも冬歌に太上天皇の御製として

この頃は花も紅葉も枝になししばしなきぞ松のしら雪
なる一首が収められてをり、「花も紅葉も枝になし」と言つて花や紅葉のそこに存在しない事を示してゐるのみでなく「松のしら雪」に花や紅葉に代るものとしての美しさを認めてゐる事も確である。

これに似た歌は、

降雪は枝に暫しも溜らなむ花も紅葉も絶て無きまは
として寛平御時后宮歌合に収められてをり、古今和歌六帖にも載せられてゐる。更にこの歌と少しく詞を異にして

降る雪はきえでも少時とまらなむ花も紅葉も枝になき頃

(冬歌、詠人しらず)

なる一首が後撰集に採録せられてゐる。これらは共に花や紅葉のな
い冬の季節にあつて、花や紅葉に代るものとして、或いは花や紅葉
を佛にしのばせるものとして雪を眺めてゐる事を示すものである。

これらの歌にあつては、春秋の花や紅葉の美しさを愛でる餘り冬
の雪にもその佛をしのぼうと言ふのであつて、花と紅葉とを春秋の
ものとするに相類しいけれども、定家の歌にあつては、下旬に同じ
秋のものを持出して来てゐるので私は一洒花をも紅葉をも同じ秋の
ものとして眺めてみようとしたのである。

しかし源氏物語にも「花も紅葉も」を春秋の風物の代表としてゐ
るばかりでなく、時代は下るけれども統後撰にも

道助法親王春かくれ侍りける年の秋道深法親王又おなじさまに
なり侍りけるを嘆きてよみ侍りける

なる詞書のもとに

みむろ山花ももみちもかつ散りて頼むかけなき谷の下草

(藤原、法眼覚宗)

なる歌が収められてをり、花やもみちを春秋のものとしてゐる事は
その詞書によつて明かであるが、更に統拾遺にも

春秋の花も紅葉もおしなべて空しき色ぞまことなりける

(釈教、前大僧正道玄)

の如く明かに「春秋の花も紅葉も」と明記してある作もあつて、春
秋の風物の代表として花紅葉を眺めようとする説に甚だ好都合であ
るけれども、私は下旬の秋のものとの対比の關係から、猶上旬の花

をも紅葉をも秋のものとして比較する考を棄てかねるのである。こ
の考はわづかに塩井雨江氏によつて否定的ではあるけれども

この「花も紅葉もなかりけり」の花といへるは秋の千草の花に
はあらず。櫻など春の花をいへる事は一首の調の上よりも著し
き事なり。

の如く取擧げられてゐる位である。

「なかりけり」の存在しないと言ふ意味に用ゐられてゐる事は前
にも述べた如く小島博士によつて指摘せられてゐる。即ち

稲妻は照らさぬ背もなかりけりいづら仄かに見えし陽炎

(恋五、相模)

夜もすがら浦こぐ舟はあともなし月ぞ残れるしがの唐崎

(雑歌上、宣秋門院丹後)

の如く具象的なものとしての存在を否定してゐるものもあれば、

数ふれば年の残りもなかりけり老いぬる計悲しきはなし

(賀歌、和泉式部)

今ぞきく心は跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれども

(冬歌、後徳六寺左大臣)

の如く抽象的なものの存在しない事を意味する場合もあるけれど
も、共にその存在しない事を示す点においては一致してをり、「問
題にならぬ」とか「花もいらぬ紅葉もいらぬ」と言つた意味に適當
した使用例は之を發見する事が出来ないのである。かくて「なかり
けり」との繋りに於いては「花や紅葉の美しさもないが」と言つた
花や紅葉を観念的なものとして之を否定すると言つた解釈も導き出
されるわけである。

更に第四句に見える「浦の苫屋」は千五百番歌合の中に

心あらむ人は中々住めぬし浦の苫屋に世を盡しても

(千四百九十番左公経卿侍)

の如く収められてをり、心ある人によつて愛せられるものである事を物語つてゐる。

少しく時代は下るけれども統古今にも

すくもたく浦の苫屋のあし籬空もすゝけて降る時雨かな

(冬歌入道前太政大臣)

の如くすゝけたわびしいものとしてではあるけれども浦の苫屋は写されてゐるのである。千五百番歌合は後鳥羽上皇を初め奉り、後京極攝政良経・内大臣通親・権太納言忠良其の他俊成・定家・家隆・雅経・慈円・顕昭等当代の代表歌人三十人に各百首の和歌を詠出せしめた頗る大きな歌合であり、山崎敏夫氏(水鏡新古今集研究号)の研究によれば、この歌合より八十一首も新古今集に撰入せられてゐるのを思ふ時、すゝけたわびしいものとしての浦の苫屋も「心あらむ人」には住んで見たいとの心を抱かした事を物語つてゐるものとして注意せらるべきである。即ち新古今に見える定家の「浦の苫屋」にもかうした作者のあこがれといふか心を引かるれもののおつた事を示してゐるものと思はれるのである。換言すれば淋しいわびしいものへのあこがれを抱く所に単なる花紅葉の美しさに酔ふ表面的なものと違つて心の深いものを感じたものと思はれるのである。

最後に「秋の夕暮」は新古今集にあつては悲しいもの寂しいものあはれなるものとして写されてゐる。即ち

別路はいつもなげきの絶えせぬにと悲しき秋の夕暮

(離別、中納言家隆)

の如く「悲しさ」を誘ふものとせられてゐるばかりでなく

寂しさはその色としもなかりけり横たつ山の秋の夕ぐれ

(秋上、寂蓮法師)

の如く寂しいものとも言はれてをり、或いは

我ならぬ人もあはれやまさらむ鹿なく山の秋の夕ぐれ

(秋下、土御門内大臣)

心なき身にもあはれはしられけり鴨立沢の秋の夕ぐれ

(秋上、西行法師)

などと「あはれ」の深いものとして描かれてゐるのである。

源氏物語にあつても秋の夕は「あはれ」なるものとして好んで写されてゐるのを見ても(註一)作者が心ある人の喜ぶ「浦の苫屋」の風景を示すのに、特にあはれの深い時として「秋の夕ぐれ」を選び来つた所にその構成的な態度を見逃す事は出来ないであらう。

三

以上私はこの歌の句毎にその意味を考へて見たのであるが、それを約めてみると大体次のやうな解に落ちつくのではないかと思ふ。即ち

淋しい秋の夕暮時遙かに眺めて見るとそこには既に色とりどりの花草の花もなく美しい木々の紅葉も見当らなくなつて了つた。たゞわびしげに苦聲の漁夫の小家が如何にも親しげに寄添つてゐる。何だかあはれ深く感ぜられて心を引きつけられずに

はをられない。

とても解したいのである。

花や紅葉の美しさを佛とする事によつて、「あはれ」な「浦の苦屋」は一入その「あはれさ」を増してゐるのであり、花や紅葉の美しさを踏み越えてゐる所に、苦屋の「あはれさ」が深められてをり、心ある人の目に親しい存在として写らずにはなかつたものと思はれる。あはれを愛しわびしさに生きると言つた境地を歌つてゐるものではないかと思はれるのである。しかもその「あはれさ」「わびしさ」は花とか紅葉とかの艶なるものを引合に出す事によつて、艶なるものをも越える境地として描き出されてゐるのである。利休が茶の湯に於ける「わび」の如何なるものであつたかは南坊録に紹臨の引歌として利休の伝へたものとして、新古今の定家のこの歌と、更に利休の加へた引歌として家隆の

花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや

といふ一首を以てしてゐるのである。

家隆の歌も春のものとして花を前に出し、後に「雪間の草」をそれ以上のものとして取出してゐるのであるが、この事は定家の歌にも移して考へる事が出来るであらう。即ち家隆の歌にあつては、まだ花の見られない早春の「雪間の草」と言つた華麗なるものとは対照的なものに心を引かれたものであり、定家の作にあつては既に花も紅葉も過ぎさつた晩秋の「浦の苦屋」の風光に心を引きつけたられたものであつて、共に利休などの庶幾した「わび」の世界を具象化してゐるものと言はねばならないのである。しかも利休が「わび」といふものは花や紅葉を越えたものとして、無一物の簡素な美しさ

ではありながら、しかもそこには花や紅葉を佛とし、裏打としてゐるものである事を物語るものでなければならぬ。

猶同じ実景とする説の中にも淋しい情趣を歌つたものとする説と、面白い風情と見る説とがある。鴻巣盛広・石田吉貞・窪田空穂・斎藤茂吉の諸氏は前説であり、山崎敏夫氏は後説を持してゐる。即ち鴻巣盛広氏は

秋の夕をおもしろしと説くは此時代の思想なりや否や。現に前二の歌共に淋しみを歌へるにあらざるや。然らばこれ亦淋しき方に見るべきにあらざるなきか。即ち前人の説を悉く退けて前述の解をなせり。敢て識者の高教をまつ。

と言はれてをり、山崎敏夫氏はまた同じ新古今の

うす霧のまがきの花の朝じめり秋はゆふべと誰かいひけむ

(秋上、藤原清輔)

見渡せば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思ひけむ

(春上、太上天皇)

などの歌を引いて、たゞ淋しいだけのものではなく、もつと広く他の要素も含まれてあはれとか情趣の深いものとかの意味に解せられるとし、古人が秋の夕をおもしろき風情と言つたのは「心ひかれる事であり、深く心に感じ入る」意味であるとせられてゐる。

元来新古今集は題によつて分類せられてゐる事は既に風巻景次郎氏の研究(註二)があつて明かである。これによれば、この歌は「秋夕」を題として十首連ねられてゐる中の一首である。しかるにこの十首一聯の秋夕の歌には、淋しい悲しい一色によつて塗りつぶされてをり、少くとも撰者がこの歌を秋の夕の淋しい情趣を描いた

ものとしてこゝに連ねてゐる事は確かであり、鴻巣氏の説の誤りではない事を示してゐる。しかし又一方淋しさを深々とたゞへた「あはれ」とか情趣とか言つたものも感ぜられないではない。しかし山崎敏夫氏の挙げられた二つの歌は秋の朝と春の夕とを詠じたものであつて、そこに「淋しさ」以外の要素の含まれてゐるのは当然である。そこには「ほのぼの」としたものと、「しつとり」したものの、「匂ひやか」なものが感ぜられるけれども、それは秋の朝とか春の夕がさうさせるのであつて、秋の夕のこともし出す情調ではないのである。もとより引台に出されてゐる以上多少同じやうなもの動きを秋の夕にも認められるにしても、これらの歌によつて秋の夕に淋しさを以外の要素のある事を示す積極的な證據とするのは適當でないと思ふ。しかし秋夕十首一聯の作品中にも、西行法師の歌の如く深く、「あはれ」に心をくだいてゐる作もあるばかりか、

我ならぬ人もあはれやまさるらむ處なく山の秋の夕ぐれ

(秋下、土御門内大臣)

の如く「あはれ」な趣を強調してゐるものもあるのに見ても、「あはれ」とか情趣とかを重んずる態度を山崎氏とは別の方面から重んじたいと思ふのである。

かくてこの歌は淋しさの中にしみじみと人の心を捉へずにはかない情趣深い風景を詠じたものとなるのであるが、実景と言つてもそれは決して実境に臨んで作つたものとは思へないのである。當時の詠風からしても定家の作家態度からしても、主観的なものをも好んで客観的な姿において表出してゐるのを思ふ時、そこに私は著しく構成的なるものを認めずにはをられないのである。即ち「秋夕」

を題として作者は直ちに秋の夕は淋しいものあはれなるものと感じ、その淋しみ——わびとでも言つた境地を描かうとして、先づわびしいもの、すゝけたものとしての浦の苫屋を拉し來り、「秋の夕暮」と組合せる事によつて一入その情趣の深からん事を期したものと思はれるのである。しかもそこにあたかも実境に臨んでの作の如く、同じ秋のものとしての既に過ぎ去つた花や紅葉を點出する事によつて巧みに淋しいもの、わびしいものとの対比を行はしめてゐるばかりでなく、華麗なるものを佛とする事によつて、この「浦の苫屋の秋の夕暮」の風景に匂ひやかなるものを夕映の空の如く一入美しく點じてゐるのではないかと思はれるのである。

彼の家隆の歌

見渡せば霞のうちもかすみけり畑たなびくしほがまの浦

(雑歌中)

には春の霞の中に更に畑を點出する事によつて、わびしきものをも匂ひやかなものによつて包摂しようとしてゐるのであるが、ここでは秋の風物の華やかなもの美しいものを既に過ぎ去つたものとして眺めてゐるのであり、佛として一脈の繋りはあるとは言つても、猶艶なるものよりもあはれなるものにしみじみとした親しみを感じてゐるのではないかと思はれるのである。而して定家の手法よりするも、必ずあはれの深いものとして「秋の夕暮」を選び、わびしいものとして又心ある人には親しいものときへ思はれる「浦の苫屋」を之に配合する事によつて、その効果を一入深からしめようとしたものと考へられるのである。更に艶なるものを之に対比せしめんとして、花や紅葉をそこに點出してゐるのであつて、そこには作者の

主観を露出させる事なく、あたかも実景の如く之を具象化して示してゐるのであつて、われわれは其處に作音の構成的な手法を強く意識せずにはをられないのである。

猶山家集に冬歌十首として収められた

花も枯れ紅葉も散らぬ山里は淋しさをまた訪ふ人もがな

なる西行の歌に「花も枯れ」と言つてゐるのは明かに秋の千草の花であり、花も紅葉もここでは秋の風物として写されてゐる事は確かである。春の花は枯れば再び咲く事はないが、千草の花の枯れるのは当然のことである。かくてここには今まで秋の野へを彩つてゐた千草の花も枯れ、山を染めてゐた美しい紅葉も散り盡して了つた後の淋しい冬枯の山里を描きえて巧みである。

西行に親しみを抱いてゐた定家が、この歌の手法を自らの作に応用したものと見るのは私一人の僻見なのであらうか。

註一、昭和二十二年八月発行京陵試験所収の拙稿「源氏物語に於けるあはれの一考察」（拙著「鑑賞より創作へ」に収む）参照。

註二、八代集四季部の題に於ける一事實（「新古今時代」所収）

附記 「万葉集卷十三の用字をめぐつて」と題して執筆の豫定であつたが、三月から四月にかけ所用のため二度も上京したので、途中で変更して舊稿を補訂して責をふさぐこととした。